

# アルジェリア政治の混乱とその背景 ——2019年大統領選挙の行方



上智大学・名誉教授／順天堂大学講師 私市 正年

## はじめに

アルジェリアでは2019年4月に大統領選挙が予定されていた。ブーテフリカは、1999年から大統領位にあり、第4期目を終えようとしていた。2019年1月18日、投票日が4月18日と決定された。ところが、2月10日、ブーテフリカ大統領が4月の大統領選挙に第5期目をめざして立候補と憲法の改正を表明した。これには多くの国民が「ありえないシナリオ」と思ったに違いない<sup>(1)</sup>。

かくて、2月22日(金)からアルジェリア全土で大規模な抗議デモが始まった<sup>(2)</sup>。以後、毎週金曜日に全国の諸都市でデモが繰り広げられ、この市民運動は「2月22日運動」と呼ばれるようになった。2月10日に立候補表明をしたブーテフリカ大統領は、2月14日スイスの大学病院に入院してしまった。このような事態は、無責任な政治体制を露呈することになり、デモはますます勢いづき、ついに3月11日、ブーテフリカが立候補の取り下げの意思表明、さらに4月2日、大統領の辞任表明にいたった。しかし、ここから問題が複雑化する。というのも、4月18日の投票日が7月4日に延期され、この間の政治運営のため、大統領に代わる上院議長を国家主席とする臨時政府が樹立されたからである。それでは、市民のデモは何を要求し、めざしているのか？ それに対する権力体制とはいかなるものなのか？ 混乱の背景には何があるのか？ 今後の行方をどのように展望しうるのか？

## 1. 大統領選挙をめぐる混乱とその推移

最初にこの混乱がどのように推移してきたのかを、「出来事経過表」(以下「表」と略記)にして整理しておく。デモの抗議や要求にも、体制側の対応にも、推移の過程で変化とブ

(1) 筆者が2018年12月、アルジェに滞在中に数人のアルジェリア人(大学教授、学生、タクシー運転手など)に、来る大統領選挙でブーテフリカが立候補すると思うか、と質問すると、全員がそれはありえない、と答えた。理由としては、ブーテフリカは病気のため意思表示もできず、この数年まったく政治の表にでられないこと、このような人物の選出はアルジェリア政治の国際的信用を失いかねないこと、国家権力はすでにウーヤフヤーなど適当な候補者を決めていると思われることなどがあげられた。  
(2) デモの規模は80万にも達したといわれる。Adlène Meddi, «Manifestations du 22 février : pourquoi les Algériens sont en colère», *Le Point Afrique*, 24 février 2019.

日付	出来事
2019/1/18	大統領令により投票日が4月18日と決定。立候補の締め切りは3月3日。
2/10	ブーテフリカが立候補の意思表示。
2/14	ブーテフリカがスイス・ジュネーブの大学病院に入院。
2/22	アルジェリア全土で大規模（80万人）なデモ。ブーテフリカ第5期立候補への反対を訴える。同時にデモ隊は首相ウーヤフヤーを「大泥棒」と名指しで非難 <sup>(3)</sup> 。デモ行進は以後、毎週金曜日に行われ、Hirak（運動）と呼ばれるようになった。
3/1	アルジェリア全土で大規模なデモ <sup>(4)</sup> 。
3/3	選挙対策委員長アブデルガニ・ザアラーンがブーテフリカの立候補の届け出。立候補を表明していたアリー・ベンフリス、ルイーザ・ハンヌーンらが立候補を取り下げ。
3/10	ANP（アルジェリア人民国軍）長官兼国防副大臣、ガイド・サーラフ将軍が、軍とアルジェリア国民は同じ価値観と原則を持ち、国家の将来像を共有している、と演説 <sup>(5)</sup>
3/11	ブーテフリカが立候補の取り下げの意思表示。今年の間までに新憲法案の作成を職務とする「憲法制定評議会」設立の意思を伝え、事実上の第4期の延長をはかる。
3/12	首相アフマド・ウーヤフヤーが辞職。代わってヌールッディーン・ベドゥイが首相に就任。
3/15	アルジェリア全土で大規模な抗議デモ（1400万人） <sup>(6)</sup>
3/17	アルジェリア人権連盟が、臨時政府の代表指名から両院議会の解散、総選挙までのロードマップを提案。
3/20	連立与党のRND（民主国民連合）とFLN（民族解放戦線）が抗議運動を容認する立場を表明。
3/26	ANP長官、ガイド・サーラフ将軍が憲法第102条に則り、ブーテフリカに大統領職の辞任を要請。
3/29	アルジェリア全土で数百万人のデモ
4/2	ブーテフリカ大統領が辞任。憲法102条により、上院議長アブデルカーデル・ベンサーラフが、最長90日間の臨時の国家主席となる。大統領選挙は7月4日に実施と決定。

(3) «En Algérie, une révolte inédite contre le cinquième mandat de Bouteflika», *Le monde.fr*, 23 février 2019.

(4) デモの規模は300万人近くに達したといわれる。Hasen Ouali, «Algérie et le camp «boutef»lippa», *Libération.fr.*, 7 mars 2019.

(5) *RFI*, 11 mars 2019

(6) デモの規模はアルジェ、オラン、ビジャーヤの3都市だけで700万人に達したといわれる。«En Algérie, un mouvement populaire en quête de leader face à Bouteflika», *Le Journal du Dimanche*, 18 mars 2019.

2019/4/5	ブーテフリカ大統領辞任後、最初の金曜日のデモ。3B（憲法評議会議長 Tayyeb Belaiz, 首相 Nouredine Bedoui, 臨時政府国家主席 Abdelkader Bensalah）の退陣と全てのシステムの解散を要求。11月解放戦争の原則に従った「市民国家」の建設を主張 <sup>(7)</sup> 。
4/8	RND 党首アフマド・ウーヤフヤーに対し、党官房長官シッディーク・シハーブが辞任を要求。ウーヤフヤーは拒否。
4/9	両院議員総会が開かれ、臨時政府の国家主席として上院議長アブデルカーデル・ベンサーラフが指名される。正式に7月4日、大統領選挙の実施が決まる。
4/11	ガイド・サーラフ将軍が司法当局がハリーフア問題、ソナトラック問題、エル・ブーシ問題などの汚職問題の訴追を再開するだろうと発言 <sup>(8)</sup> 。
4/12	第8回金曜デモ。デモ隊が、ANP 長官、ガイド・サーラフ将軍と3B（憲法評議会議長 Tayyeb Belaiz, 首相 Nouredine Bedoui, 臨時政府国家主席 Abdelkader Bensalah）の退陣を要求。システムの解体と権力者たちに対する「デガジュ（出ていけ！）運動」が強まる <sup>(9)</sup> 。
4/16	ANP 長官、ガイド・サーラフ将軍がワルグラでの演説で司法当局が汚職の摘発を再開する旨、語る。あわせて、DRS元長官タウフィーク将軍に対する謀反容疑の警告を伝えた <sup>(10)</sup> 。
4/16	憲法評議会議長タイイブ・ベラーイズが辞任。後任はカーミル・フェニシュ。
4/19	デモのスローガンに「タタナーハウ・ガー（全員、立ち去れ！）が登場 <sup>(11)</sup> 。体制のボスたちの退陣要求が始まる。国家権力システムの解体を主張し始める。
4/20	前首相アフマド・ウーヤフヤーと財務省大臣（アルジェ銀行元総裁）ムハンマド・ルカールが公金横領と不当な特権行使の嫌疑で裁判所に召喚される <sup>(12)</sup> 。
4/20	RND のメンバーが党首アフマド・ウーヤフヤーに党首の辞任を要求。
4/22	臨時政府の主席ベンサーラフが召集した、大統領選挙実施のための選挙管理委員会立ち上げのための両院議員総会が開催されたが、出席者はわずか30人程。与党のFLN 党首ムアード・ブーシャリブも RND 党首アフマド・ウーヤフヤーも欠席 <sup>(13)</sup> 。
4/23	ガイド・サーラフ将軍がブリダの軍基地で演説。憲法に従い、予定通り7月4日に大統領選挙を実施する旨の発言。ベンサーラフ臨時政府国家主席がよびかけた国民会議をボイコットした連立与党のMPAとTAJを批判。2月22日運動が要求する体制を象徴する全ての者の退陣をあらためて拒否 <sup>(14)</sup> 。

(7) «Acte7 : Départ de tout le system», *El Watan*, 05 avril 2019.

(8) «Dénonçant des infiltrations étrangères : Gaïd Salah annonce la réouverture des affaires Khalifa. Sonatrach, et «El Bouci» », *Le quotidien d'Oran*, 11 avril 2019.

(9) «En Algérie, l'armée tente d'imposer sa feuille de route», *Le Temps*, 20 avril 2019 ; «L'Algérie peut-elle se débarrasser du système?»», *RFI*, 15 avril 2009.

(10) «Le général Ahmed Gaïd Salah, en première ligne face aux manifestants algériens», *l'Opinion*, 17 Avril 2019 ; «Gaïd Salah menace le général Toufik et affirme que «toute les perceptives possibles restent ouvertes...» », *El Watan*, 15 avril 2019.

(11) «Algérie : ce qu'il faut retenir du 9e vendredi de mobilisation», *Le Point*, 20 avril 2019.

(12) «Ahmad Ouyahia et Mohamed Loukal convoqués par le tribunal de Sidi M'hamed», *El Watan*, 20 avril 2019.

(13) *El Watan*, 23 avril 2019.

(14) «Transition politique : Gaïd Salah veut fermer le jeu», *El Watan*, 24 avril 2019.

2019/4/24	グループ KouGC 会社の経営者 kounief 兄弟が汚職容疑で逮捕される。同会社はブーテフリカ（前）大統領の資金提供者であったとも言われる <sup>(15)</sup> 。
4/25	ガイド・サーラフ将軍が汚職の訴追を急ぐ司法機関にあらためて敬意を表する <sup>(16)</sup> 。
4/25	2013年に中断していた、ソナトラック元総裁、その後エネルギー省大臣になったシャキーブ・ハリールに対する訴訟手続きが再開される。嫌疑は為替法違反と外国との不正な資本移動 <sup>(17)</sup> 。
4/26	第10回金曜デモ。スローガンに「ガイド・サーラフは出てけ！」「軍隊は我々の軍隊である。ガイドは我々を裏切った。」「民衆はブーテフリカも、ガイド・サーラフも望んでいない」などが登場。市民には、ガイド将軍に憲法第7条と第8条の適用を期待していたが、それを裏切られた、との思いがあった <sup>(18)</sup> 。ただし、報道によれば、デモの動員力は減退し、抗議の勢いは衰えつつあった <sup>(19)</sup> 。
4/28	新聞は、汚職捜査の手がブーテフリカ前大統領の弟、サイド・ブーテフリカにも及ぶ可能性を伝える <sup>(20)</sup> 。
4/30	ガイド・サーラフ将軍がビスクラで予定どおり7月4日の大統領選挙の実施と汚職の関係書類の処理を進める、と述べ、あらためて市民が要求する「システムの全ての象徴の退陣」を拒否する <sup>(21)</sup> 。
5/2	第11回金曜デモ（Hirak）。相変わらずガイド・サーラフ将軍の退陣とシステムの解体を要求。膠着状態とデモの勢いに陰りがみられる <sup>(22)</sup> 。

レがみられ、そこに混乱の背景や権力構造に内在する問題点を見て取れるからである。

「表」から抗議行動と混乱の性格が変化していることがわかる。今日の混乱状況の直接的な出発点が、2月10日ブーテフリカ大統領が第5期目をめざして立候補の意思を表明したことにあることは間違いない。少なくともアルジェリア国民にとっては、ありえない出来事であったのである。ブーテフリカ大統領は、2005年の秋、病に倒れた後、2013年4月から7月まで80日間もパリの病院に入院し、退院後はほとんど公の場に姿をみせないにもかかわらず、2014年第4期目に立候補し、当選した。しかし、第4期に入ってからブーテフリカ大統領は、病状がさらに悪化し、寝たきりで自らの意思表示もできない状態である<sup>(23)</sup>。

全く予想外の事態に直面したアルジェリア国民の抗議行動がまもなく始まった。2月22

(15) «Les frères Kouninef écroués à la prison d’el Harrach», *l’Expression*, 25 avril 2019.

(16) «Lutte contre la corruption», *l’Expression*, 25 avril 2019.

(17) «Ouverture d’une information contre l’ex-ministre de l’énergie», *l’Expression*, 25 avril 2019.

(18) «10ème vendredi pour le départ du régime : «un seul Gaïd, le peuple !» », 26 avril 2019 ; «Après une semaine des plus mouvementées, l’acte x du Hirak s’annonce«Explosif» », *L’Expression*, 25 avril 2019.

(19) «A Alger, les craintes de l’essoufflement du mouvement», *Le monde*, 26 avril 2019.

(20) «De nombreuses enquêtes sur la corruption ouvertes par la justice : Ces affaires qui mènent à Saïd Bouteflika», *El Watan*, 28 avril *El Watan*,

(21) «Gaïd Salah tente d’éviter un changement radical du système», *El Watan*, 30 avril *El Watan*,

(22) «Un vendredi crucial : Le peuple «déterminé» face à Gaïd Salah», *El Watan*, 03 mai 2019.

日（金曜日）の抗議デモには、アルジェリア全土で80万人の市民が参加した<sup>(24)</sup>。1992年2月の内戦突入以来、アルジェリアでは戒厳令がしかれ（2011年2月アルジェ県を除き解除）デモや集会を規制していたのでこれだけの規模のデモは内戦終結後、初めてであった。それ程までに、ブーテフリカの立候補表明は衝撃が大きかったともいえよう。最初は、デモの抗議対象は、ブーテフリカの立候補と政府の代表たる首相アフマド・ウーヤフヤーに向けられた。ANP（アルジェリア人民国軍）

長官兼国防副大臣（大統領が名目的な国防大臣であり、副大臣が事実上の軍行政の最高指揮官）ガイド・サーラフに対しては、批判の目は向けられていなかった。むしろ、3月10日、ガイド・サーラフによる「軍とアルジェリア国民は同じ価値観と原則を持ち、国家の将来像を共有している」との発言（注5参照）は、軍が市民のデモを支持している、と受け取られた。

3月11日、ブーテフリカが立候補を取り下げる意思を表明し、あわせて国民に向けて7項目のメッセージを伝えた<sup>(25)</sup>。第一に、年齢と健康上の理由から次の大統領選挙には立候補しない。第二に、4月18日の大統領選挙は実施しない。第三に、政府の大改革を行う。第四に、包括的かつ独立した憲法制定評議会を設立し、憲法案の作成と大統領選挙の日程作成を委託する。この評議会の任期は今年末までとする。第五に、憲法制定評議会の提案に基づき大統領選挙を実施する。第六に、大統領選挙は評議会に委託された国民政府の監督下で実施される。第七に、ブーテフリカは、この任務が成功するようあらゆる努力を惜しまない。以上の7項目である。しかし、この意思表示とメッセージは、事実上のブーテフリカ第4期の延長をはかるものとみなされ、国民の激しい反発をかった。同日、首相アフマド・ウーヤフヤーが辞任した。3月15日のデモには、全国で1400万人もの市民が参加し、与党のRND（民主国民連合）もFLN（民族解放戦線）も、抗議運動を容認する姿勢

---

#### 筆者紹介

1972年北海道大学文学部（西洋史学専攻）卒業、1982年中央大学大学院（東洋史学専攻）修了。博士（史学）。1985年上智大学外国語学部専任講師。1997年同教授、2018年上智大学総合グローバル学部定年退職。現在、上智大学名誉教授、順天堂大学講師。専門は、北アフリカのイスラーム運動、民衆イスラームの研究。主要著書は、『アルジェリアを知るための62章』（明石書店・2009年）、『マグリブ中世社会とイスラーム聖者崇拜』（山川出版・2009年）、『北アフリカ・イスラーム主義運動の歴史』（白水社・2004年）、『原理主義の終焉か—ポスト・イスラーム主義論』（山川出版・2012年）、『中東・イスラーム研究概説—政治学・経済学・社会学・地域研究のテーマと理論』（明石書店・2017年。共編著）など。

---

- (23) 従って、新聞の報道で「ブーテフリカ大統領が民衆デモなどを受けて辞任した」（『朝日新聞』4月30日、朝刊）とあるのは、正確ではない。彼の意味で辞任したのではないからである。外国大使は、アルジェリアに赴任すると国家元首たるブーテフリカ大統領に信任状を渡してから公務を開始することになるが、信任状を大統領に渡せない大使が30カ国以上にのぼっていた。
- (24) 市民の抗議行動は、「ヒラーク・22フェブリエ（2月22日運動）」とか「ヒラーク・シャープ（民衆運動）」「平和的革命」などとよばれるようになった。
- (25) «Bouteflika annonce le report de l'élection présidentielle et une période de transition», TSA, 11 mars 2019.

をとった。

結局、3月26日、ガイド・サーラフ将軍が、憲法102条<sup>(26)</sup>に則り、ブーテフリカ大統領に辞任を要請し、4月2日ブーテフリカが辞任した。それに伴い、上院議長アブデル・カーデル・ベンサーラフが最長90日間の臨時政府の国家主席となること、大統領選挙は7月4日実施、と決定された。

市民たちは、これを現権力が自らの体制を維持する戦略とみなし、ここからデモの批判は国家権力の中心へと向かった。デモのスローガンでは、権力を象徴する3B（憲法評議会議長 Tayyeb Belaiz, 首相 Nouredine Bedoui, 臨時政府国家主席 Abdelkader Bensalah）の退陣を要求（表の4/5参照）し、さらに権力システムの解体を叫ぶ「デガジュ（出ていけ！）運動」が始まった。4月9日、両院議員総会にて、上院議長アブデル・カーデル・ベンサーラフが正式の国家主席に指名され、同日、彼が7月4日を大統領選挙とするデクレ（政令）を発布した。

これを境に市民運動の攻撃対象は、上院議長ベンサーラフと ANP 長官、ガイド・サーラフ将軍へと向かった。ベンサーラフもガイド・サーラフも、憲法の尊重を盾に、102条に従った「7月4日大統領選挙」の実施を主張した<sup>(27)</sup>。これに対し、市民たちは、憲法に従うならば、第7条「国民は全ての権力の源である。国家の主権はもっぱら国民に属する。」と第8条「憲法を制定する権利は国民に属する」に従うべきである、として「7月4日大統領選挙」の実施に反対をし始めたのである<sup>(28)</sup>。しかし、ベンサーラフとガイド・サーラフが市民の要求を拒絶し続けたので、市民たちは、この拒絶は将軍ガイド・サーラフの力によるものであるとして、「ガイド・サーラフは出てけ！」「軍隊は我々の軍隊である。ガイドは我々を裏切った。」と叫んで、直接にガイド・サーラフを批判するとともに、権力システム全体の解体を要求するようになった（表4/12と4/26を参照）。

実は、市民運動が、上院議長ベンサーラフと ANP 長官、ガイド・サーラフ将軍に対し攻撃をし始めるのと軌を一にして、ガイド・サーラフ将軍は反汚職キャンペーンを始めた（以下表の該当日を参照）。4月11日、ガイド・サーラフ将軍は「司法当局がハリーフア問題、ソナトラック問題、エル・ブーシ問題などの汚職問題の訴追を再開するだろう」と発

---

(26) 憲法第102条は、立法議会は、大統領が辞職または死去した場合は、上院議長が、最長90日まで国家主席の職務を引き受け、期限内に大統領選挙を実施する、と規定している。

(27) 両者は、ほとんど毎日、このような主張を繰り返している。たとえば、「Bensalah chef de l'Etat : Le pouvoir menace la révolution pacifique des Algériens», *El Watan*, 09 avril 2019 ; «Bensalah convoque le corps électoral : La présidentielle fixe au juillet», *El Watan*, 11 avril 2019 ; かくてガイド将軍は、4月23日、ブリダの軍基地において一種の政治ゲームを止めて、予定通り選挙を実施する、という明確な意思表示を示した。「Transition politique : Gaïd Salah veut fermer le jeu», *El Watan* 24 avril 2019.

(28) 『民衆は憲法第7条と第8条の適用を要求する』, *al-Khabar*, 12 avril 2019 ; «Article 102 : Bensalah et les constatations populaires», *Le quotidien d'Oran*, 11 avril 2019.

言し、4月16日「ワルグラでの演説で司法当局が汚職の摘発を再開するだろう」と語った。実際に、4月20日「前首相アフマド・ウーヤフヤーと財務省大臣（アルジェ銀行元総裁）ムハンマド・ルカールが公金横領と不当な特権行使の嫌疑で裁判所に召喚され」、4月24日「ブーテフリカ前大統領への資金提供者と言われるグループ KouGC 会社の経営者 kounief 兄弟が汚職容疑で逮捕され」、4月25日「2013年に中断していた、ソナトラック元総裁、その後エネルギー省大臣になったシャキーブ・ハリールに対する訴訟手続きが再開され」た。さらに、4月28日、新聞は「汚職捜査の手がブーテフリカ前大統領の弟、サイド・ブーテフリカにも及ぶ可能性を伝えた（表4/28を参照）。

軍の最高指揮官ガイド・サーラフ将軍に対する市民の批判が強まり始めると同時に、ガイド・サーラフ自身によって反汚職キャンペーンが始まった。両者の間に意図的な関係があることは間違いない。それとともに汚職の捜査権限を握っているのは諜報機関DRS（情報治安部局）であるので、この反汚職キャンペーンを裏で糸を引いている者がいるはずである。軍とDRSの関係が敵対的になっていたとの報道（表4/16参照）はまともには受け取れない。権力内部の動きを詳細に分析する必要があるからである。

## 2. 軍の支配体制の確立とその構造

上述のように2019年大統領選挙をめぐる混乱とその背景、さらには行方を考えるためには、アルジェリアの権力構造と軍の関係を明らかにしなくてはならない。そもそもアルジェリアの軍の支配体制はどのようにして確立したのか。

### (1) 軍の優位性の確立と制度的独立<sup>(29)</sup>

アルジェリアの国家形成の土台は独立戦争中（1954年～62年）に築かれた。独立戦争は、党であるFLN（民族解放戦線）と軍であるALN（民族解放軍）の両輪によって指揮されたが、1956年のスーマーム会議で決定した文民優位の原則は、FLN代表アッバーン・ラマダーンが暗殺（おそらくALNにより）されたことにより、覆され、以後軍が党（政治）の上に立つ軍優位性が確立した。

1962年の独立後、軍優位性は維持されただけでなく、1965年6月19日のクーデタ以後、軍（ANP＝アルジェリア人民国軍）の制度的独立が強まっていく。クーデタは、ベン・ベラ（初代大統領）が軍の力を弱めようとしたことに反対する意図から起こされたもので、その中心人物ブーメディエン（第2代大統領）は、軍指導者たちの任期を長く保証し、軍の指導者たちに、土地・建物や現金を与えて取り込みをはかった。こうして、ブーメディエンが1978年12月27日、死んだとき、彼が残した唯一の国家制度は、FLNではなく、軍

---

(29) 私市正年「アルジェリアにおける軍とクランと地域主義—擬似「部族集団」による政治支配の構造—」『北アフリカ地域における主要『部族』の役割に関する調査研究報告書』（「平成25年度外務省委託調査報告書」エリコ通信社2014年3月）101-121頁。

隊だったのである。ブーメディエンの後継者としてシャーズィリーを国家の指導者に選出したのは、軍高官たちであった。シャーズィリーは、独立以来、第二軍管区長官の地位にあった軍人である。

シャーズィリーの治世下で、軍はあらたな展開をとげた。それは三つの段階をふんだ。第一段階：1984年軍参謀部の再設置。それはシャーズィリーの保護下に軍の強化をはかることであった。第二段階：1988年暴動における軍の介入。それは、1990年、参謀本部長官ハーリド・ナッザールが、国防省大臣（陸軍の指揮官）に就任することへとつながる。第3段階：1991年6月の戒厳令。その6ヵ月後に大統領は失脚する。それは、軍の制度的独立の完成を意味する。1992年1月11日のクーデタは、1965年6月19日のクーデタと同様に、軍の、国家と制度と社会に対する支配を、正当化することになった。7年間（1992-1999年）で3人も政治指導者が交代したが、軍幹部は長い任期を保証された。

1988年10月暴動の後、軍は一時的に政治から離れたが、1992年1月、クーデタによって再び、政治に介入し、1990年代内戦中の政治を支配した。1999年ブーテフリカが大統領に就任した。ブーテフリカは大統領就任後、軍とは一定の距離を保ち、軍幹部の人事刷新も行った。国防省大臣の任命では、数ヵ月にわたって軍と対立したが、結局大統領自身が国防省大臣を兼務することで決着した。しかし、大統領が国防省大臣を兼務すると言っても名目的なものでしかなく、実権は副大臣が握った。大統領は軍幹部の実質的な任免権を持たず、たとえばガイド・サーラフ（1939年生）は2004年から現在まで ANP 長官の地位に、2013年から現在まで国防副大臣の地位にある。

## (2) DRS の創設と政治介入

アルジェリアの諜報治安警察機能の中心に位置するのは DRS（情報治安部局）である。DRS は軍特権集団の中核を構成し、組織的には国防省に所属しているが、2014年のデクレ（政令）によって法的捜査機関の管轄は国防大臣から DRS 長官に移ったので DRS は軍参謀本部や大統領の管轄から離れ、DRS 長官の指揮下で自由に活動できるようになった<sup>(30)</sup>。

諜報機関のルーツは独立戦争中までさかのぼるが、今日の DRS は、1988年暴動に遭遇したシャーズィリー大統領が1990年9月4日、創設した機関である。しかし、DRS はインフォーマル性が強く、組織や活動の実態はほとんど明らかにならない<sup>(31)</sup>。2015年9月、マスコミは「DRS 長官ムハンマド・メディエンヌ（通称タウフィーク）の引退」を報道し、後任にバシール・タルタグが就任したことを伝えたが、公式のデクレは出されていない。そのため、現在の混乱の背後に、タウフィークの陰謀が関わっているとの話まで出て

(30) Mohammed Hachemaoui, «Qui gouverne (Réellement) l'Algérie ?», *Politique africaine*, no.142, juin 2016, pp.169-190.

(31) 人員は10万人と言われるが、公表されていない。また今回の混乱状況のなかでも、長官は全く姿をあらわさない。



くるのである（表4/16参照）。

実際のところ DRS の機能は厳密な意味での軍の領域を超えている。DRS は、第一に、汚職捜査権を握っている。第二に、国内商業および外国貿易の大規模な取引を支配している。それは、国家予算の管理者、国営企業の経営者、大使や駐在武官、大臣、省庁の事務長や高官、海外との取引にあたる仲介責任者や駐在員などの任免に参与する。第三に、すべての省庁に非公式監視員を配置し、絶えず監視・統制している。彼らは、各省庁の機材購入や設備やインフラの整備に関する許認可権をもっているため、大規模な賄賂を彼らにもたらすことになる。第四に、各省庁の人事採用や昇進に発言権をもっており、責任あるポストに関しては、DRS発行の、採用や昇進に関する資格カードが必要である。そのためここでも賄賂が発生することになる。

### (3) 軍と DRS を中核とするアルジェリア政治権力の構造

インフォーマル性の強い DRS が政治に参与するようになってから、アルジェリア政治は非常にわかりにくくなった。DRSの権限の重要な点は、汚職の捜査権限を握っていることである。アルジェリア社会に公然とはびこる汚職・腐敗の受益者である軍や高官は、自らの一番の弱点を DRS によって握られているのである。従って、アフマド・ゴザリー（1991-1992年首相）もハーリド・ナッザール（1990-1993年国防大臣）も DRS によって統制されていたことを告白している<sup>(32)</sup>。DRSは、ブーテフリカ政府でも、2004年人民軍長官ムハンマド・ラマリーや官房長官ラルビ・ベルハイルを辞任に追い込んだりした。

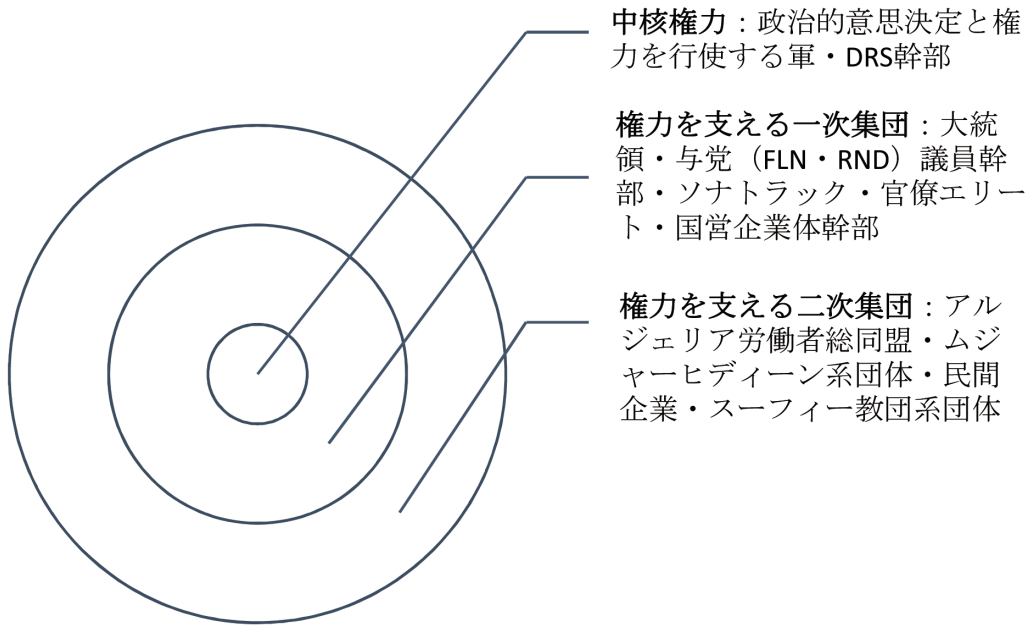
メディアが、2007年から始めた「ブーテフリカとそのクラン（徒党）」の汚職嫌疑に関する報道も、さらに2010年1月22日に始めた反汚職キャンペーン「清潔な手を」をメディアが大々的に報道し始めたのも、DRSの画策によるものであった。今回の混乱においても、市民運動の攻撃が軍（ガイド・サーラフ将軍）や政府（上院議長ベンサーラフ）に向かうと同時に、反汚職キャンペーンが始まった。報道によれば、DRS長官バシール・タルタグが4月2日、辞表を提出した。これは、軍と DRS が対立し、軍が優位に立った結果、バシール・タルタグが DRS から追い出された、と説明されている<sup>(33)</sup>。また DSS（治安諜報部局）から元の DRS という名称に戻った、とも伝える<sup>(34)</sup>。もちろんこうしたことについて公式の発表はなされていない。アルジェリア権力が常に用いてきた政治戦略は、制度（名称）改革によって変化を装うことで隠れた権力構造を維持することである。このことを踏まえれば、軍と DRS の敵対やガイド・サーラフ将軍が元 DRS 長官タウフィークに対し謀

(32) Mohammed Hachemaoui, «Changement institutionnel vs durabilité autoritaire», *Cahiers d'Etudes africaines*, n° 220, 2015, p.668.

(33) «En Algérie, l'armée reprend la main sur les services de renseignement», *Le monde*, 10 avril 2019. 後任にはユースフ将軍が選ばれたが、反対があって決定していない、とも伝えられる。

(34) «Algérie : La D.S.S est enterrée, retour le DRS !», *Maghreb intelligence*, 06 avril 2019.

(図) アルジェリアの権力構造



反容疑を警告した、との報道（表4/16）や5月4日のタウフィークとタルタグの逮捕報道（注42参照）も軍・DRS体制維持の戦略と見る方が事実に近いように思われる。軍とDRSの幹部はアルジェリアの権力構造の中核をなし、両者は本質のところでは利害が一致しているはずだからである。彼らによって政治的意思決定と権力が行使されている。この中核権力を支える集団として一次集団が形成され、大統領と与党幹部、官僚エリートなどによって行政が執行され、さらにその外側の二次集団が体制を支える世論を形成する役割を担っている。それを図式化すると図「アルジェリアの権力構造」のようになる。

## おわりに

以上の分析をふまえてアルジェリアの大統領選挙の混乱の行方を考えてみたい。既に説明したように、上院議長ベンサーラフとANP長官、ガイド・サーラフ将軍らによる7月4日大統領選挙実施の主張と市民たちによるガイド・サーラフ将軍をはじめとする権力者の総退陣とシステムの解体の要求は、妥協点を見出せず、膠着状態に陥っている。他方で市民の運動にも動員力が減退し、勢いに陰りがみられる（表4/26、5/2を参照）。早くも与党のFLNとTAJ（アルジェリア希望連合）はガイド将軍の支持を表明し、軍主導による収束をはかろうとしている<sup>(35)</sup>。そもそも市民運動が要求する権力者の総退陣とシステムの解体はありうるのか。アルジェリアの権力構造から明らかのように、軍・DRSと大統領・政府与党幹部は一体となったシステムを構成しており、この退陣と解体は権力構造全体を土台から破壊することを意味する。従ってほとんど不可能なことと言える。また市民

(35) «Le FLN et TAJ apportent leur soutien à Gaïd Salah», *L'Expression*, 04 mai 2019.

運動におけるリーダーの不在、組織力の弱さ、政治プログラムの欠落を指摘し、運動は短期間で収束するとの指摘もある<sup>(36)</sup>。さらにアルジェリアの政治的野党はきわめて脆弱であり、政権を担えるような政党は存在しない。いわゆる「アラブの春」後、エジプト、チュニジア、モロッコなどではイスラーム政党が躍進し、政権を担当するような状況が生まれた。アルジェリアのイスラーム政党は多数に分裂しているだけでなく、支持をほとんど集めることはできず、またMSP（平和のための社会運動）は与党に参加した。市民団体はどうであろうか。組合員200万人を抱える最大の労働組合UGTA「アルジェリア労働者総同盟」は、いわゆるFLN傘下の組織であり、体制をサポートする役割を担っている<sup>(37)</sup>。LADDH（アルジェリア人権連盟。1989年認可）をはじめとする人権や政治にかかわるNGO団体は、歴史も浅く、また世俗主義的、西欧的スタンスをとっているため、イスラーム系団体との間に亀裂があり、アルジェリア国民の中に広くは浸透していない。

以上の検討からいくつかのシナリオが考えられる。第一は、予定通り7月4日に選挙が行われる。もちろん軍体制側の候補者が選出され、軍・DRSの支配する体制は維持される。第二は、両者が折り合うような選挙を実施するには、多様な代表からなる委員会を設置して合意を得る必要がある、として7月4日の投票を延期すること<sup>(38)</sup>。ただしこれには、時間をかけたら合意を得られるのか、という問題だけでなく、憲法違反の問題もある。第三は、市民の要求が通って、ベンサーラフとガイド・サーラフ将軍らが退陣し、あらたに臨時政府を組織すること。その後の選挙の仕方は多様なオプションが考えられる。第四は、暴力的衝突になり警察・軍によってデモが鎮圧される。1990年代の「内戦」のトラウマの影響、統制のとれたデモ、4月末の段階で既にデモの勢いが衰え始めていること、などから判断してこの可能性は小さい。この場合でも、おそらく7月4日に予定通り、軍政府側の主導にそって選挙が行われるだろう。

もっともありうるシナリオは第一であるが、そう判断する理由は、上述のようなアルジェリア権力構造の特徴と代わりうる政治アクターの不在である<sup>(39)</sup>。しかし、その場合でも、果たして適当な候補者はいるのか、ということが大きな問題となる。DRSによって首相ア

---

(36) «Impasses, menaces et issues», *El Watan*, 15 avril 2019 ; «Intervenant sur l'évolution du bras de fer qui oppose le Hirak au système», *L'Expression*, 21 avril 2019.

(37) UGTAの書記長Sidi Saïdは1997年からこの地位にあり、今回のデモにも組合としての立場を明確に指示していない。そのため組合員から辞職を求める声があがっているが、その地位に留まっている。«Rencontre des Fédérations de wilayas, aujourd'hui à Alger : UGTA à l'heure du changement», *Le quotidien d'Oran*, 21 avril 2019 ; «Sidi-Saïd lâche Bouteflika», *Liberté*, 11 avril 2019.

(38) «Intervenant sur l'évolution du bras de fer qui oppose le Hirak au système», *L'Expression*, 21 avril 2019.

(39) 政治権力が軍に支えられている点では、アルジェリアとエジプトは似ている。その意味ではエジプトのシーシ政権が憲法改正案の可決（4月22日・23日投票）によって長期政権（最長2030年まで）を可能にさせたことは今回のアルジェリアの混乱の行方にも影響を与えるだろう。

フマド・ウーヤフヤーがブーテフリカの後任としてお墨付きを得ていた、と考えられたが<sup>(40)</sup>、3月12日辞職、4月20日公金横領と不当な特権行使の嫌疑で裁判所に召喚された（表3/12、4/20を参照）。彼はなぜ失脚したのか。考えられることは、軍の中に強い反対があった可能性と、軍・DRSは改革（反汚職）を装うための材料として彼を利用したことである。いずれにしろ、体制側と市民運動側とが妥協しうる適当な候補者を野党や市民団体の中から選出することは、ほぼ不可能と言ってよい。また、もし独立戦争を体験していない世代から候補者選びをすることになれば（年齢を考えるとその可能性が大きい）、軍・DRSにとってもその選考は難しい課題となるだろう<sup>(41)</sup>。

（追）

本文を書き終えた後、5月4日、DRSの元長官タウフィークと前長官バシール・タルタグ、サイード・ブーテフリカ（ブーテフリカ前大統領の弟）の逮捕というビッグ・ニュースがテレビや新聞で流れ、その後、ほぼこれが事実として認められた<sup>(42)</sup>。しかし、これをそのまま信じることはできない。考えられることは、ガイド・サーラフ将軍は、自分自身に直接及ぶようになった市民たちの批判・攻撃をかわすために、この問題を持ち出したのではないか、ということである<sup>(43)</sup>。状況が非常に流動的で判断が難しいが、おそらくガイド・サーラフは、軍・DRS体制維持のためには、市民のデモの要求に応える（変化を装う）必要があるだろう。それ故、名目的にせよ、これら3人の逮捕拘留は重要な意味があった。さらに問題を複雑化させたのが、5月9日に労働者党党首ルイーザ・ハンヌーンが逮捕されたことである。しかし、彼女に、軍体制に対する謀略という嫌疑をかけて逮捕することは、市民のデモへの圧力メッセージになることは間違いない。逮捕拘留されているルイーザ・ハンヌーン、タウフィーク、タルタグ、サイード・ブーテフリカの4人について、5月20日に釈放要求を認めるか否かの判断がなされると報道されているが<sup>(44)</sup>、この結果も逮捕の意図がどこにあるのかを考える上で重要な材料となろう。いずれにしろ、現段階ではこれら一連の逮捕は、ガイド・サーラフ将軍の意向にそった軍・DRS体制の維持と判断するのがもっとも妥当であろう。

\* 本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。

(40) 私市正年「アルジェリア政治の現状—2019年大統領選挙の課題」『中東研究』第534号（中東調査会、平成31年1月）71-82頁。

(41) 野党ではアリー・ベンフリリス（自由前衛党党首）やルイーザ・ハンヌーン（労働者党党首）らが立候補すると思われるが、当選の見込みはない。

(42) *TSA*, 5 mai 2019 ; *El Watan*, 07 mai 2019.

(43) *RFI*, 08 mai 2019.

(44) *El Watan*, 13 mai 2019.